

教職大学院

Newsletter

No. 56

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.10.19

地域に根ざす教職大学院

愛知教育大学教職大学院 中妻 雅彦

9月12日、愛知教育大教職大学院（以下、本学）の研究調査のため、福井大学を訪問する機会がありました。訪問調査の目的は、本学の抱えている修了報告書や学校実習などの課題を、他の教職大学院の先進的な事例を参考にして改善し、今後の本学の教員養成カリキュラムに生かすことです。本学は、ストレートマスターを受け入れてくれる連携協力校が、全県下64校に広がり、現職教員の連携協力校（勤務校）が1学年15名ずつ30校となっています。学校数と地域の広がり、教職大学院の中で最大規模ではないかと思えます。連携協力校とはどの学校とも良好な関係ですが、本学として歯がゆく感じていることがあります。それは、本学が、連携協力校の実践や研究活動を十分に支援することができないことです。ストレートマスターの院生を受け入れてくれている学校、現職教員院生を派遣してくれている学校を支援することも、教職大学院の目的だと考えているからです。

福井大学の拠点校方式は、様々な機会にその概要をうかがっており理解しているつもりでした。しかし、訪問し、実際の研究指導、学生指導の様子をうかがい、一番感銘を受けたことは拠点校、連携校への支援でした。拠点校は当然として、現職教員を派遣している連携校にも、研究者と実務家教員がペアで指導に出向き、院生の指導だけではなく、これらの学校の実践研究を支え、その地域の他の学校ともネットワークを形成しているということです。いろいろな事情はあるにせよ教職大学院に入学したのですから、院生は意欲があるわけで、これらの皆さんを育てることは比較的スムーズにできることです。しかし、院生が在籍する学校の実践や研究に参加し、それを支えることには様々な困難があると予想されます。本学との協働が進められている連携協力校はまだ多くはありませんが、その困難さは容易に想像できません。それを乗り越えて、拠点校、連携校への支援ができていのは、教職大学院設置以前からの学校との良好な関係や協働にあるようですが、この協働を可能にした福井大学の地域への取組は学ばなければいけないことだと感じました。

また、年数回行われるラウンドテーブルに、教員養成にかかわる方だけではなく、福祉、街づくりなど多彩な方々にも報告、参加していただいていることも、地域の中での大学を強く意識しました。教員は対人関係職ですから、同様な専門的な職種の方と交流することは、専門職としての教員の在り方を考えるためにも大切なことです。今後の教員や学校を考えると大切な要素となるはずです。これにより、専門職としての教職を考察することと共に、地域で子どもを支えるネットワークを形成することにもなります。地域との協働を進める教職大学院と位置づけることもできます。これらの地域との協働を教職大学院の授業として取り組むことの意味は大変大きいことです。

今後の教員養成を考えると、教職大学院を含めた修士レベルでの教員養成モデルはいくつか例示されるでしょう。その教員養成モデルの生かし方や進め方は、自治体の規模、地域性、教員採用数の動向等によって異なってきます。一つのモデルを取り入れても、それがどこでも運用できるわけにはいかないことが予想されます。その時に、地域における協働の内容が問われることになります。福井大学の拠点校方式を、本学が実施することは困難です。しかし、本学が存在している地域を生かし、地域に根ざした教員養成制度を創造しなければ、教員養成大学としての存在意義が問われることにもなります。福井大学の拠点校方式に学び、地域に根ざす教職大学院を構想しながら、本学のカリキュラム改善を進めることを考えています。

内容

- 地域に根ざす教職大学院 (1)
- 夏期集中講座に参加して (2)
- 教員免許状更新講習実施状況報告 (7)
- Staff 紹介 (9) 拠点校だより (10)
- 夏の研究報告 (14) 書評 (20)

夏期集中講座に参加して

7月22日から8月24日にかけて、各3日間で構成される3つのサイクルの集中講座が開催されました。そこでの学びを、さまざまな院生にレポートしてもらいます。

スクールリーダー養成コース2年／福井市灯明寺中学校

佐々木 徳之

私は、「日々体験しながら学び、学びを現場に活かす」現場の教師の抱えた問題や、その中でともにビルドアップしていくなかで得た成果や体験が、他の学校でも生きてくるのではないかと思い教職大学院へ通っている。

今回は勤務校から離れ大学の落ち着いた環境の中で、時間を忘れじっくり事例研究や理論書を読み、そして実践記録を振り返ることができた3日間×3 cycle＝9日間だった。この集中講座には学校の理解と同僚の支えのもとで出席することができた。改めて感謝したい。

Cycle 1は斎藤喜博先生の『教育学のすすめ』を読んだ。研究主任をしている自分にとって、いかに学校を巻き込むかをテーマにさせていただきに「学校というところは学校の持っている機能をつかい、職員集団の力をつかい、子どもの学習集団の力を使って子どもたち一人一人の力を引き出し、全体の力を引き出していくようにしなければならないのである」という部分に50年近く前の実践とは思えない、今も通じて変わらないものを感じた。

Cycle 2はセングの『学習する組織』を読んだ。難解な経済書ではあるが、現在の研究で抱えていた閉塞感に答えてくれる箇所があった。学習する組織とは未来につながる力を持続的に伸ばしている組織ということだ。このような組織にとっては、単に生き残るだけでは十分ではない。「生き残り適応する学習」は重要であるし、「生涯学習」とのつながりも確かに必要なものである。この力を促進するために、5つのディシプリンがあるように思う。それらは、個人や組織内のチームにおける生涯にわたる研究と実践の積み重ね、そのものなのである。

こうしてCycle 1～2を積み重ねるうちに「理論と経験と実践の架橋」の必要性がだんだんわかってきた。他の人の実践や理論書を読みながらも、自分の頭の中では自分の実践・経験と対比しながら考えている。カンファレンスではそれをふまえて自分の実践を言葉にすることで整理

がなされ、捉え直している。自己改革はここでなされることに気付く。Cycle 1では自分の実践と比較しないように、Cycle 2ではつまみ読みではなく全てを網羅するようにと事前に聞いて読んで見えたが、記憶に残っているものは最近の自分とかかわりのある経験に特化しているのに気づいてきた。教職大学院も2年目となり、このカンファレンスの長所が少しずつ自分のものになってきた気がする。

Cycle 3では実践記録を紡いでいった。知識基盤社会という今の不安定な社会では答えのない場合が多い。その際、自分の持っている実践記録からスタートし、思考のプロセスを繋ぐという行程と、カンファレンスによって言葉にしてみ気づく事を文字化する「語りによる知(物語知)」の繰り返しは出口の見えない現場の解決策の1つのように思う。

灯明寺中のような拠点校でない連携校で教職大学院の学びを取り入れていくのには、様々な障害と限界があるかもしれない。こういった学びをしていくのは大変忙しいが、教職大学院の先生方、共に学ぶ院生の方々、そして本校をはじめとする現場のたくさんの仲間達の理解と励ましに支えられながら、学ばせていただいていることに感謝し、今後も夢と目標をもって学んでいきたいと思った。



スクールリーダー養成コース1年／福井県立福井特別支援学校

源甲斐 恵美

夏期集中講義は、勤務校での会議や研修会等の業務と重複し、その合間を見つけて、Cycle 1～3のa b日程を変則的に参加する形で受講した。その際、勤務校には会議の日程調整等配慮していただき、同僚の先生方の理解と支えがあるからこそ大学院での学びが成り立っていることに、心から感謝し、またその学びを学校へ還元する自分の役割の大きさを改めて実感した。

この集中講義で私が得たものはとても大きく、中でもCycle 2で出会った『コミュニティ・オブ・プラクティス』は、大学院に在籍しなければ絶対に自ら手にしないであろう理論書であったが、私の学校現場での実践に大きな気付きを与えてくれた。それは学校内にあるコミュニティが、維持・発展するための方策であり、今私が抱えていた課題の一つのヒントとなった。

私は大学院に入学し、合同カンファレンスで自分の学校について語る機会が増えてから、本校の強みと弱みについて考えるようになった。これまで自分の学校について他者に語る経験がほとんどなかったので、語ることの大切さを感じた瞬間であった。

本校はグループ研究を研究の柱に置いており、その研究体制のメリットは、テーマが同じ教員同士が共通の課題で議論を行うために、研究が深まりやすいこと、クラスや学部を解いた教員集団で構成されることから、子供の育ちを縦の軸で考える機会を得ることができることだと考える。反面、デメリットとして、約10個のグループ間の横のつながりが薄く、グループ内で得た成果を共有し、学校としての研究成果として蓄積しにくいことが考えられる。それぞれのグループで得られた知識は素晴らしく、魅力的な実践もたくさんあるが、共有しにくい状況にあ

る。語ることで感じたこの弱みを強みに変えるためのヒントを『コミュニティ・オブ・プラクティス』から得ることができた。そして、この私の気付きは、すでに校内で行おうとしているコミュニティの横のつながりを強化するという取組を裏付けするものであった。

さらにCycle 3でこれまでの合同カンファレンスやラウンドテーブルでの学びやこれまでの自分の実践をまとめたり、小グループでそれらを報告し合ったりしたことで、研究の方向性を確認し、いろいろな先生からご助言いただき、新しい気付きを得ることができた。

夏期の集中講義を通して、改めて語ることの大切さを感じた。語ることで自分の考えをまとめたり、まとめることで視点を変化させたりすることができる。校内の教員間でも日頃から子供について気軽に語り合えるような学校を目指していきたいと考えている。



教職専門性開発コース1年／坂井市丸岡南中学校

角谷 健大朗

夏期集中講座Cycle 1「長期にわたる学習の展開とそれを支える教師の実践」で、私は福井大学教育地域科学部附属中学校の長期にわたる実践記録・実践研究を読みました。そこには実践者の見方や考え方等が書かれてありましたが、私にとって特に印象深かったことは「価値のある探究活動を授業にデザインする」という考え方でした。「生徒が熱心に互いの意見を交わし合い、楽しそうに活動している姿を見ると満足し、達成感を覚える。

生徒の話し合いが白熱してくればそれだけ『質が高まった』と判断しがちになってしまう。一部の生徒だけがどんどん新たな発見をし、その提案に引っ張られるようにして無理やり理解させられたグループ活動では、本当の探究活動とは言えない」ということから、探究活動においてリーダー的な生徒ばかりを追うのではなく、その教科を苦手とする生徒に視点を合わせ、習得の一步一步の過程を見ることが必要であり、全体の流れだけに注目し

てはいけないのではないかと、という考えを持つことができました。

Cycle 2「実践のコミュニティ／学習する組織」では、ビジネス書『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、実践コミュニティとはどのようなものなのかを考えました。最初は、ビジネス書ということもあり、まったく教育と接点を見出すことができませんでした。読み進めるにつれて、実践コミュニティとはあるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、接続的な相互作用を通じて深めていく集団だということが分かりました。同時に、実践コミュニティは、今、自分たちが教職大学院で取り組んでいることではないとも感じました。教職大学院には院生同士の意見交流、職種の異なる人たちや校種の異なる先生、県外から来られた先生との意見交流があり、一つのテーマに基づいて知識を出し合い自ら学び続けています。この取組が、コミュニケーションや価値を生み出し、一人一人の成長につながっているということ Cycle 2で学ぶことができました。

Cycle 3「実践のテーマ・実践者の力量形成・コミュニティのプロセスをとらえ直す」では、今までの自分自身の経験やインターンでの生徒との関わり方、授業実践や授業参観、部活動指導を振り返り、これまでの反省や課題、これからの展望を考えました。授業実践を振り返ってみると、最初は自分の思うような授業ができませんでしたが、学校生活や授業を通して生徒たちとの関わる機会が増え、生徒たちとのコミュニケーションがとれ

るようになってからは、自分の思い通りに近い授業ができるようになってきました。この経験から、生徒との関わりを持つことが、授業や部活動、生徒指導に大きく影響してくることが分かりました。また、インターンでの振り返りを価値のあるものにするためにも、学校での体験や経験を記録に残しておくことの大切さを改めて感じました。

今回の夏期集中講座では、普段あまり手にする機会がなかった実践記録や研究記録、ビジネス書を読むことができ、視野が少し広がった気がします。また、自分の実践を振り返ることによって、まだまだ未熟な部分も多々あることに気付くことができたので、これからの大学院生活やインターンでは、今回新たに学んでことやとらえ直したことを意識して、継続的に行動に移していきたいと思えます。



教職専門性開発コース2年／坂井市丸岡南中学校

齋藤 宏

夏期集中講座では、『省察的实践とは何か -プロフェッショナルの行為と思考-』を選択し、読み進めた。本書は教職大学院のカリキュラムの基礎になっている「省察」という行為を改めて認識させるものであった。本書の前提は、近年の専門家＝プロフェッショナルへの権威の低下を皮切りにクライアントの要望が多様化していることや、クライアント自身が専門家への依存から脱却する必要があることに基づいている。しかし、大衆に対する専門家の権威が低下しているからと言って、この知識基盤社会の現代では専門的技術のない専門家の姿は想像できない。ただし、従来のようにクライアントが専門家の言うことを鵜呑みにし、専門家もクライアントに知識や自分なりの解決策を提示するだけでは、クライアントの満足を得ることはできない。そこで、その解

決策として「省察」を提言する。「省察」は、専門家自身がクライアントや同僚とのやり取りを通じて「何を要求されているのか」や「何が問題点なのか」等を考え、話し合い、クライアントと課題・解決策を共有することによって、クライアントの要望に応えることを意味する。これは従来型の専門家とクライアントとの関係と異なる。「省察」を行う専門家は、クライアントからは頼りない専門家と思われる可能性があるが、クライアントの視点に立ち、同じ枠組みで解決策を考えようとする姿勢を保持する。この姿勢はこれからの社会で必要なことである。

以上がこの本書についての前提であるが、当然、この専門家の中には教師も含まれており、専門家＝教師、クライアント＝生徒、もしくは生徒の保護者と考えるこ

とができ、昨今の教師を取り巻く社会情勢を考えれば、教員を目指す私自身にも「省察」を取り入れていかなければならないと考えた。それを私自身のインターンの経験と重ねてみれば、授業の前段階「基礎的基本的な知識・技能の習得」の場面で「こっちは教師なのだからとりあえず言った通りにしなさい」、「ここを覚えなさい」というニュアンスを出していたことを思い出す。実践記録を見ても、その時の生徒の反応は穏やかで一見すると集中しているように見えるが、実際は別のことを考えたり、理由が分かっていなかったりしたことが多々あった。この夏期集中講座を経て、共通した枠組みが私自身と生徒との間で出来ていなかったのではないかと考える。この教師と生徒との共通した枠組みについて、今の私は「学びの必然性」が当てはまるのではないかと考えた。生徒が「学びの必然性」を感じてこそ、初めて専門職としての教師の働きが十分に活きるのではないかと、そして「学びの必然性」は個々の生徒

によって違うのが当然であれば、教師を目指す私はその個々の生徒を理解しようと努めなければならず、その方策として、生徒を共通のフレームとし、狭くは同僚や保護者、広くは地域にまで理解の幅を広げていかなければいけないと考えた。



教職専門性開発コース1年／坂井市丸岡南中学校

牧田 祥代

夏期集中講座は、3日間を1Cycleとして3Cycleが開講されました。Cycle 1は、「長期にわたる学習の展開とそれを支える教師の実践」というテーマのもと県内外の小中学校の実践記録を読みました。Cycle 2は「実践のコミュニティ／学習する組織」をテーマにビジネス書から実践コミュニティについて考え、Cycle 3では「実践の展開・実践者の力量形成・コミュニティのプロセスをとらえ直す」という点で、これまでのインターン生活を振り返りました。

Cycle 1で私は、長野県伊那那小学校の『学ぶ力を育てる』という実践記録を読み、そこでは各学級での総合的な学習について、子どもたちの会話や様子が細かく記載されていました。特に私が興味をもったのは、1年生から始まり学年をまたいで2年生になるまで続いた「お店屋さんごっこ」の実践です。休み時間に始まった小さな「お店屋さんごっこ」が、椎茸栽培、街頭販売にまで発展していき、子どもたちは連続して発展する課題に向かって意欲的に取り組んでいました。私が一人で読み進める段階では「すばらしい子どもたちだな」としか感じることはできませんでしたが、クロスセッションで先生方の様々な考えを聞いて、文章には書いていない重要なことに気づきました。それは、学級担任の子どもたちに対する誘導の仕方や、教師同士、学校全体の連携・働きの重要性です。子どもたちが学び続けることができるよりよい課題を設定するためには、学校全

体が動かなければならないことが分かりました。

Cycle 2ではビジネス書の『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読みました。企業の中で実践コミュニティの在り方や重要性について述べられている本であり、企業や経営の視点から教育のことをどのようにみるのかを疑問に思いつつ読んでいきました。読んでいく過程で、実践コミュニティの意義や大切さなどは分かりましたが、いざ自分自身の経験や実践と重ね合わせて考え始めると全く考えが浮かびませんでした。しかし、クロスセッションでの先生のお話から、自分自身も実践コミュニティに属していることに気づきました。それは、同じ目的・目標を持った学生同士で語り合うことができる教職大学院のことです。教職大学院は、それぞれインターン校での実践や悩みを大学院に持ち寄り、考え直し、またインターン生活に生かすという発展し続ける実践コミュニティだと思います。今まではカリキュラム通りになんとか大学院とインターン校を行き来してきましたが、これからはその意義や関係性を認識して行動することで、より深く学ぶことができるのではないかと思います。

Cycle 3では自分の専門教科である英語の授業について、インターンでの授業実践や授業参観、また自分が学習者だった頃の思いと教育実習での経験を振り返り、考え直してみました。そして、学び合いではグループ学習が重要であり、グループ学習を成立させるために

は、生徒が興味をもち意欲的に取り組める課題設定と、クラス全体の雰囲気づくりが不可欠だと気づきました。今までは学習指導と生徒指導は別のものだと考えていましたが、それは大きな間違いでした。

この夏期集中講座では、インターン校での実践から離れ、これまでの自分の歩みや考えを振り返り、客観的にみることができたと思います。また、実践記

録やビジネス書を読むことで、普段見ることができない領域を垣間見て、自分の視野を少しですが広げられた気がします。これからの大学院生活で、この集中講座をきっかけに、それらの領域をより深く掘り下げていたらと思います。

スクールリーダー養成コース1年／おおい町名田庄小学校

赤井 孝行

今年の夏期休業はいつもと全く違った。覚悟はしていたが、とても忙しかった。しかし、充実した日々を過ごすことができた。それは、いつもならできない経験をすることができたからである。大きな経験は次の2つである。

1つは新しい生活スタイルの経験である。3回の集中講義のため、おおい町から3連日で通うわけにもいかない。そこで、9日間の単身赴任をした。宿はホテルではなく、妻の実家にお世話になった。

そして、もう1つは3日間で教育実践書や理論書を読み進めたり、自分の過去の実践を振り返ったりしながら、レポートにまとめ発表する経験である。

この2つは、いつもの夏期休業ではできないことである。忙しく慣れない活動の9日間ではあったが、とても貴重な経験となった。

Cycle 1では、教育実践書を読み進めた。『教える空間から学び合う場へ』は、牧田先生が中学校の数学教師として実践したことが書いてある。同じ数学教師として、頭の下がる思いで読み進めていった。授業展開のダイナミックさと単元構想のデザイン化が凄く、同じような授業展開を真似してみたいと思った。それでも、とてもすぐには真似できそうにない。奥の深さを感じ、圧倒された。レポート後の意見交流会では、探究をテーマとした福井大学教育地域科学部附属中学校の長年の研究実践の話を知ることができた。附属中学校の凄さを感じた。

Cycle 2では、理論書を読み進めた。『コミュニティ・オブ・プラクティス』は企業向けに書かれたものである。ナレッジ社会の知識形態の実践がサブタイトルである。ナレッジ社会とは何のことか分からずに、インターネットで調べたのが、この本を手にした時の最初の行動である。その上、分厚くて洋書を訳したものである。読み進めることができるのかとても不安であった。読み進めていくうちに、教職員集団や学級集団のマネジメントに生かすことができる内容であることに気がついた。とくに、発展していくコミュニティという概念はと

ても新鮮であった。コア・グループやコーディネーターの存在が重要であり、これは集団をマネジメントするときに必要な考え方である。

Cycle 3では、自分の過去の実践を振り返りレポートにまとめた。新採用時からの実践を振り返ると見えてくるものがいくつかあった。その時々で、重点を置いて実践してきたことや学習指導と生徒指導に取り組んだ日々がよみがえってきた。中でも過去の実践を通して関わった人達との取組が、大きくよみがえってきた。一人で実践してきたつもりはなかったが、改めて自分の過去の実践を振り返ると、同僚との関わり合いの中で支えられてきたことが見えてきた。そして、同僚から学び続けている自分が見えてきた。子ども達を教えているが、子ども達からも様々なことを教えてもらっていることも見えてきた。

9日間の夏期集中講座を終え、過去の自分をしっかり見つめなおすことができた。2学期が始まっているが、サイクル1の実践書の中で出会った牧田先生のような授業を目指したい。Cycle 2の理論書の発展するコミュニティを教師集団や学級集団の中に作っていけるようになりたい。Cycle 3で過去を見つめなおし、素晴らしい同僚に巡り合えたことに感謝しつつ、今の同僚とともに素晴らしい実践を展開していきたい。



実践的指導力の更なる向上を目指して

—平成25年度教員免許状更新講習（必修領域）実施状況報告—

福井大学教職大学院 教授 松田 通彦

今年度の福井大学教員免許状更新講習（必修領域）は年間5回の開催を計画し、8月末までに4回分を終了した。例年通り、福井県教育研究所主催の「新任教頭研修講座」と連携・協働し、実践・省察型の講習を実施した。以下はその概要報告である。

1. はじめに

平成25年度と同講習の計画・立案は前年度9月から取り組んできた。県の教育庁義務教育課及び総務部大学・私学振興課に受講対象者の調査・集計を依頼したところ、本年度の受講者は830人程度との結果が得られたので、これを基に計画を立て申請・募集を開始した。

今年度4月に一応受講申込みは締め切ったのであるが、必修領域の受講希望者は291名（平成25年5月31日現在）であり、昨年度の377名（平成24年6月15日現在）を大きく下回ったため、開催回数や少人数グループの編成等に工夫を要した。

2. 本年度講習の変更・改善点

本年度講習に係る主な変更点や改善点は以下の通りである。

- ①開催回数を6回から5回に縮減
- ②レジュメ「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ」の「1構成」の各講習に係る表記方法を整理
- ③実践レポートの作成・提出方法の変更
- ④新任教頭研修の充実

この中で、①については受講者減少に伴うやむを得ない措置であり、②については一日の講習内容の流れを受講者によりわかりやすくするため、開始時刻の統一化や全体会と分科会の明示化など表記上の工夫を試みたものである。一方、③、④については、関係者からの改善要望に直接応える内容でもあるので少し説明を加えたい。

まず、③についてであるが、毎年、受講者から出されるレポート提出に関する要望の中に、レジュメに記載されている「本講習のまとめ：第2日（第3日）の午前中に大部分を作成しますが、講習後、感想や振り返りもあわせて完成原稿とし、提出します。」の表現に見直しを求める声が少なくなかった。つまり、2日間（選択領域を含めれば3日間）の講習が、評価も含め2日間（3日間）で完結しないことを前提としていることに対する疑問と不満があったのである。当初、大学側のねらいとしては、実践の省察や講習の振り返りにも十分時間をかけてほしいという思いがあったためであろうが、今回、レポート作成を講習後の宿題にしてほしくないとの受講者の要望に出来る限り沿う形で改善することと

し、レジュメを「本講習のまとめ：第2日（第3日）の午前中に完成できない場合には、講習後、感想や振り返りもあわせて完成原稿とし、提出します。」のように変更した。これにより、講習終了と同時にレポートを提出する受講者が出てくることになったが該当者は全体の約1割弱であった。また、当然のことながら、このことによって、受講者のレポートの評価に悪影響が出ないようスタッフ内で申し合わせを行った。

④については教育研究所からの改善案であった。本講習における新任教頭の大きな役割は、少人数グループ内での受講者のファシリテーターを務めることであったが、研究所の提案は、2日目の午前中、受講者が他者の優れた実践記録を書きまとめている間は、新任教頭が直接ファシリテートする場面が少ないため、その時間を教頭研修の一環としてより有効に活用したいというものであった。

具体的には、教頭を全員一か所に集めて、講習の途中で独自にファシリテーションの振り返りをさせたいというものであり、そのことはその後の実践の一助になるはずであるというものであった。実際、自らの実践を踏まえた意見交換の後は傾聴技術の更なる向上が見られ、教頭自身の自信にも繋がっていった。今回の改善策は新任教頭からの評価が高く、次年度以降も継続すべきとの思いを強くした。

3. 本年度講習の概要

福井大学教員免許状更新講習の必修領域として位置付けられている「教育実践と教育改革Ⅰ：12時間」と選択領域である「教育実践と教育改革Ⅱ：6時間」のカリキュラム構築には、教職大学院が大きく関わっている。特徴的なこととして次のような点が挙げられる。

- ①必修12時間（2日間）に選択6時間を加えた合計18時間（3日間）で完結する教育実践・省察プログラム
- ②少人数グループによる実践の語り合い・傾聴を基本にした省察型講習
- ③校種、年齢、教科、地域等の壁を超えたグループ編成

①については、3日間連続の受講者の割合は、31.6%で昨年度の実績37.7%と比較すると下降している。3日間受講者は他者の優れた実践を踏まえながら自身の実践を省察する意義や必要性を十分理解し研修成果に満足しているが、3日目を受講しない傾向は毎年の課題であり、カリキュラム構成や中身の効率化等々も含め、今後、慎重に検討を継続したい。

また、②、③にも関連する受講者からの評価については、「講習の内容・方法」「知識・技能の習得の成果」「運営面」の3項目のアンケートに回答をいただいているが、夏の講習4回分の「教育実践と教育改革Ⅰ」（必修領域）の結果は、「良い」が全体の55.6%（42.7%）、「だいたい良い」が42.4%（50.6%）、「あまり十分でない」が2.0%（5.9%）、「不十分」が0%（0.8%）であった。「良い」と「だいたい良い」の合計が98.0%、「不十分」との回答が0%であるなど、過年度に比し、受講者から極めて高い評価を得られたことは特筆に値する。今後も、現状に満足することなく、受講者の声を尊重しながら更なる充実を図ってまいりたい（括弧内は昨年度実績）。

4. 終わりに

今回でこの更新講習も5年目に入っており、受講者の間には導入当初の不安や動揺もなく制度として定着してきた雰囲気の色濃く感じられ、全てのプロ

グラムを円滑に実施することができた。

3.にも記したように、受講者の満足度も極めて高く受講態度も申し分なかった。特に、自身の実践を様々な校種や年齢等の同僚と語り、聴き、書き記すという体験の意義や価値を評価していただけたのが大変心強かったように感じる。これは、ファシリテーターとして参画いただいた76名の新任教頭の地道な支援や助言があったからでもあり、関係各位に改めて感謝の意を表したい。

しかしながら、受講者数の回復と併せて、優れた実践記録の収集、ミニ講義や講義内容の一層の精選等、より充実した講習にするために解決すべき課題も少なくない。福井大学方式を更に徹底・定着させるための不断の努力を今後も怠らないよう、気持ちを新たにしているところである。

最後に、今年度の免許更新講習に係る受講者ならびにサポートいただいた新任教頭の感想を2、3紹介してまとめとしたい。

【受講者の声】

- ・今までの自分の実践を振り返る良い機会となった。異校種の教員と話すことができ、大変有意義な時間が過ごせた。3～4人のグループではとても話しやすく、受け入れられ認められる場が学習では大切だと実感した。自分の授業でも、児童にこのような体験をさせたい。（小学校教諭）
- ・今までにこれだけ考え、学び合った研修はありませんでした。チームでの活動、クロスセッションを今後もお願いします。大変勉強になりました。資料（プレゼン）もよくわかるもので、家に帰って復習します。（中学校教諭）
- ・自分の実践してきたこと、これからの目標、改善すべき点など、一度立ち止まって考えなければ流されてしまうような日々の中で、再確認できてよかった。今、現場で直面している課題や問題に他の先生方がどんな気持ちで取り組まれているのかを聞いて自分も頑張ろうとか、こうあるべきという姿が明確になった。新しく変わっていく教育に一步踏み出していかねばという気持ちが強くなった。（高等学校教諭）

【新任教頭の声】

- ・今回の研修は、ファシリテーターとしての研修であったが、私自身は、初めてお会いする先生方の教師としての人生に少しでも触れることができたことを嬉しく思います。その中には、子を思い日々教材研究をする先生の姿、子の荒れに日々立ち向かい何とか寄り添おうとする先生の姿、発達障害の子の言動に何か解決の糸口を見つけようと頑張る先生の姿、協働を重んじ学年を学校全体を思う先生の姿などが見られました。異年齢集団、異校種集団でのグループ作りは大変効果的だったと思います。私自身学びの多い一日でした。ありがとうございました。（小学校教頭）
- ・職員室の担任であるという自覚を持ち、今回学んだ「場づくり、引き出し、つなぐ」ということを日々の活動の中で活かしていきたいと思います。勉強になりました。（中学校教頭）
- ・ファシリテーターの研修と実践を積むまでは、「司会」と同じようなものだろうと気楽に考えていたが、両者は全く違うものであり、自分の技量次第でグループの意見交換も深まりも大きく変わってくることを実感した。ファシリテーターについて研修を受けることは、教頭としての資質能力を高める上で非常に大切であることを後輩の教頭先生に伝えたい。（高等学校教頭）
- ・話しやすい雰囲気づくりや傾聴という視点は、今後も勤務校での職務の中で心がけていきたいと思う。（特別支援学校教頭）

Staff 紹介



半原 芳子 hanbara yoshiko

はじめまして。9月より特命助教として着任しました半原芳子（はんばら よしこ）と申します。「半」も「原」も漢字自体は易しく名字にもよく

使われているのですが、「半原」となると大変珍しく、日本全国探してもおそらく私の家族・親戚だけの希少な名字だろうと思います。これは福井出身の夫の姓なのですが（私の出身は大分です）、こちらに来て福井のみなさんからも聞いたことがないと言われ、やっと福井の「半原さん」たちに会えると期待していた私は少々がっかりしてしまいました。とはいえ、珍しい名前なのでみなさんには覚えていただきやすいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

私の専門は日本語教育です。主に外国人の大人への日本語教育に関わっていますが、社会活動として長年外国人の子どもの学習支援にも携わっています。日本語教師は1990年の入国管理法の改定によって外国人が急増したことを背景に確立した職業で、まだまだ歴史が浅く社会的に認知されていない職業の一つであると思います。私は90年代から日本語教師をしており今年で17年目になります。ですので、私の日本語教師としての人生はそのまま日本語教師という職業の歴史であると言えるかもしれません。

よく日本語教師はどんな人に日本語を教えているのですかと聞かれますが、日本語を学ぶ人たちは年齢も国籍も職種も目的も実にさまざま、これは一人一人の日本語教師によって経験が異なってくると思います。私の場合は、主に技術研修生（専門は、自動車・機械・製造・ITなど）、留学生、外国人社員、外国人研究者の方たちに日本語を教えてきました。2008年に日本がインドネシア・フィリピンとEPA（経済連携協定）を締結してからは、インドネシア・フィリピンから来た介護福祉士候補者の方たちへの日本語教育にも関わっています。

言葉は道具ですので、日本語を教えるといった場合日本語そのものを教えるというよりは、その言葉で「何を」学ぶかが大切になってくると思います。例えば、介護福祉士候補者の日本語教育ですと、食事・入浴・排泄が三大介護と言われているのですが、食事をするということはどのような意味を持つことなのか、その食事を楽しみ健康的な生活を送るためにはどのような介助を行な

えばいいのか、利用者さんの残存能力を發揮できる食事の介助とはどのようなものなのか、などを教室で候補者らと共に考えます。私は介護福祉士ではありませんので、介護の技術的なことを教えることはできません。しかし、介護という営みを、候補者らと共に自分たちの持っている知識や経験を活かして（言葉で）捉え、考え、深めることを大切にしています。

外国人の子どもへの学習支援でも言葉で「何を」学ぶかが大切です。子どもの場合、それは教科だと思いません。よく外国人の子どもは日本語が分からないという理由で教科（主に言葉をより駆使する国語や社会）の学習時には在籍しているクラスから取り出され、「これは〇〇です」という文型や動詞の活用といった言葉の形に注目した学習支援が行われることが多いです。しかし、言葉は道具であるというスタンスに立てば、その道具を駆使して子どもたちが学ぶべきものは教科であると言えます。また、外国人の子どもの場合、彼らは「母語」を持っています。子どもたちには来日前母語で築き上げてきた自分の世界（思考・感情・アイデンティティーなど）があり、親との関係があります。そうした意味で母語は子どもたちの根っことも言える極めて大切なものです。私は東京で仲間とNPOを立ち上げ、学校の先生方と連携しながら、教科を日本語と母語の両方を使って学ぶ学習支援を行なっています。

ここまで、私の専門やこれまで行なってきたことについて紹介してまいりました。少しは私という人間や日本語教育のイメージを掴めていただけたでしょうか。教職大学院に日本語教育が専門である私がいることについて不思議に思われる方もいるかもしれません。実は、かくいう私も、念願の福井大学教職大学院に今現在自分がこうしていることがまだ現実感を持って捉えられていません。ただ、これは日本語教師をしていて最高に幸運なことであると同時に、この仕事への最大の自負でもあるのですが、人間の営み、例えば、思うこと・考えること・感じること・誰かと関係をつくることなどのすべては言語で行なわれていることを考えると、日本語教師はどんな分野の方たちとも一緒にやっていける仕事、もう少し格好の良い言い方をすれば、多分野の方たちと協働で人間の可能性を追求していける職業であると言えます。みなさんに支えられ、また、みなさんを支えることができる存在でありたいと思っています。これからみなさんと共に学ぶことをとても楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。

拠点校だより

福井市中藤小学校

高間 恵美

「広くて明るいですね」、「木の香りがしますね」、「こんな新しい学校で授業ができていいですね」、この夏たくさん先生方が本校を訪れて、このようなお声をくださいました。そうだ、このような新しい造りの小学校で仕事ができる私たちは幸せだったんだ、とそのときやっと気付くほど、移転開校してのこの半年は無我夢中の毎日でした。



本校は、「一人一人が輝き共に学び合う」の研究主題のもと、「学びの発見がある授業」、「学びの転換がある授業」、「学びの広がりがある授業」をめざして研究を進めています。子どもたち一人一人が授業で輝き、授業の中で自己存在感を味わえること、そして学ぶ楽しさや喜び、達成感や成就感をつかみ取ることができることをめざしています。そのためには、メンバーが固定された学級の中で、学級担任一人が努力する教育スタイルでは限界があるのではないかと考え、重点単元の中で「学級を開く」学習スタイルを昨年度より試みています。今年度はサブテーマを「さまざまな仲間と互いに考えを高め合いながら」とし、自分の学級集団だけでなく、隣のクラスの仲間や違う学年の仲間、担任以外の先生、地域の人々などに関わりながら学習することで、めざす授業が実現できるのではと考えました。

昨年度は「学級を解いた学習」を試み、たった1時間でも違う学級の友だちと学習することで、児童の意欲が単元を通して持続し生き生きと学ぶ姿を見ることができ、私たち教員もこの学習スタイルでの確かな手応えを感じることができました。今年度は、「異学年合同学習」に力を入れ、前期の指導主事訪問の提案授業では、図工科で1年生と3年生の合同学習を行いました。その結果、児童の「関心・意欲・態度」は自学級だけで学習している状態よりもはるかによくなったが、それぞれの学年における教科の目標達成についてはどうか、という課題も残りました。

現在、11月の公開研究会に向けて、前期の課題をいかに克服するか検討中です。



私は今3年生の学級担任をしており、どの学級も教室のドアをフルオープンにして授業を行っています。手空きの教員はオープンスペースで4学級の授業を見ながら宿題の点検などをし、必要に応じて教室に入って支援を行っています。朝の会で歌を歌っていると、いつの間にか音楽担当の教員が指導をしていたり、授業中知らないうちに他の教員が気がかりな児童に声をかけてくれたりしています。校舎の造りの影響ももちろんありますが、「学級を開く」授業スタイルが、自然と「学級」という壁を越えて全教員が全児童をみていこうという雰囲気を生み出しているように感じます。

そして、忘れてはならないのが、「教職大学院」の存在です。拠点校となった23年度より、大学院のスタッフには本校に足を運んでいただいています。今年度は、低中高学年部会に常に参加していただき、アドバイスをいただいています。他にも提案授業のためのプレ授業や、指導主事訪問日の授業も参観していただいています。また、合同カンファレンスの度に中藤小学校の取組を相談させていただき、同じテーブルになった先生方には本当に励ま



れてきました。現在、ストレートマスターのM1が2名、M2が2名、スクールリーダーのM2が私を含めて2名おり、大学院とのパイプ役となっています。

この夏休み、子どものいない新校舎を多くの先生方が訪れ、感心して帰られました。来る11月19日に行われる公開研究会では、2年生と6年生でそれぞれ「学級を解

いた学習」、3年生と4年生で「異学年合同学習」を提案します。ぜひ、新校舎で学ぶ子どもの姿をご覧ください。多くの先生方に来ていただいて、子どもたち同様私たち教員も「さまざまな仲間と互いに考えを高め合って」成長していきたいと願っています。

啓新高等学校

木下 純子

私が勤務する啓新高校は、教職大学院のある福井大学文京キャンパスとは芦原街道を挟んで向かい側に隣接しており、福井の教育の場の中心に位置する私立の高等学校です。昭和37年4月福井精華女子学園（昭和2年9月創立）を母体として福井女子高等学校が開校。平成10年4月男女共学化に伴い、啓新高等学校となって新たにスタートし、今年で16年目（高校開学51年目）を迎えました。生徒数は男子331名、女子429名、計760名、うち普通科227名、専門学科533名。クラス数は、1学年11クラス、2学年9クラス、3学年10クラス、計30クラス。普通科、情報商業科、ファッションデザイン科、調理科、4科3コースを設置しており、「真・善・美」「行学一路」を建学の精神とし『可能性への挑戦』をテーマに生徒一人ひとりにゴールを設定し、個性が花開くよう「学習」と「生徒指導」の両面で支え、情熱と愛情を持って教育活動に取り組んでいます。

今から7年前の平成16年に本校は、福井大学との連携協定を結び、翌年の平成17年4月より、学校長自ら教職大学院の前身である福井大学大学院教育学研究科・学校改革実践研究コースに入学したのを機に、授業改革プロジェクトチームが編成されました。福井大学の先生方と本校の教員10名が月1回の全体会をもちながら、それぞれの科（普通科・情報商業科・生活文化科・調理科・福祉科）で授業改革の取組を行っていきました。その後、家庭科の坂本が学校長に引き続き大学院で学び始めたことをきっかけに、本校が教職大学院の拠点校になりました。平成21年度より毎年一人ずつ教職大学院に

入学して学ばせて頂くことで、継続的な学校改革の取組を実践しています。

21年度には宮腰教諭が大学院で学ぶことになり、教職大学院の森先生のご提案もあり、坂本教諭と宮腰教諭を中心として有志8名で新たに「授業研究会」が立ち上がりました。最初の1年目はまず、同年校長の発案でスタートした、すべての授業をオープンにして教職員全員が他の教員による授業を自由に見学するという公開授業を利用して、研究会でも教科を超えてメンバーの授業を見合って意見交換し、授業力向上を目指すということから始めました。しかし、授業をみる視点において、教師の指導法ではなく、生徒の学びを見取るという参観の視点がはっきりしていなかったこともあり、学科・教科の壁を越えて授業を見合うと言ってもなかなか他教科の授業については話しにくい雰囲気があり、率直な意見交換ができていたとは言えませんでした。その後2年目には、「生徒の主体性を育てる」という研究会のテーマが提案され、従来から続く板書を中心とした一方的な知識伝達型の授業スタイルから、生徒の学びを中心とした探求型の授業スタイルへの転換を模索する中で、生徒の授業中の活動を見取りその姿を語れるようになってきました。また、積極的に他校の公開授業参観に足を運ぶなどの活動が続けられ、啓新高校では初となる『研究紀要』を作成することが出来ました。

平成23年度は「身近なところから具体的な課題を見出してみよう」と、大学院で学ぶ人だけのものではなく会のみennaにとって、課題として話し合っていけるようなテーマを設定し意見を出し合い、三つの授業規律を取り入れ授業に臨む姿勢を正すところから出発しました。昨年度は、同じクラスを担当している他教科のメンバーでグループを編成し、生徒の活動を見取りグループごとに振り返りをすることで生徒理解も深まり、また、一部では他教科とコラボした授業を実践するなど、更に発展的な広がりが見られるようになり、部署・学年・教科・経験年数の枠を超えて、コミュニティは生徒の学びの変化を語り学び合う関係ができてきました。

本年度は、教職大学院からインターンシップの学生を迎えることで「学校をひらき」、研究会ではメンターを引き受けることで「自身をひらき」、風穴を明け新しい風を



吹き込むことで、生徒、教員、学校にとって新たな学び合いの関係が構築されてきています。メンバーも院生2名を含め20名に増え、6月のオープン授業週間には、7名が教職大学院のストレートマスターのみなさんに授業を公開したことで、自己の実践を通して「ひらく」ことの意義を感じ、更に発展しつつあるコミュニティになってきています。個人ではなく、チームで取り組むことで少しでも多くの生徒を成長させることができ、生徒が成長することで教師も成長する。私立高校という異動のない環境において、力量のある教員も未熟な教員も、学び合うことで個々が成長し合えるようなシステムを作り出していくことが必要だと感じています。本校授業研究会は、こ

のような「学びの場」を持続し進化させていきたいと考えています。



福井県特別支援教育センター

野村 陽子・船谷 友代

1. 当センターの取り組み

福井県特別支援教育センターは、障害のある子どもや教育的ニーズのある子どもたちを支える保護者や担任、園や学校、地域を支える教育機関です。障害児者支援における教育と医療、福祉の一体化を目指して、こども療育センター、福井東特別支援学校とともに福井県立病院に隣接して昭和58年に開設されました。「特別支援教育」だけで独立し、指導主事を12名も抱える教育センターは、全国的にも珍しく現在は9機関しかありません。「福井地区」、「丹南地区」、「坂井・奥越・吉田地区」という地区体制を取り、地域や園・学校の実態に合わせながら、障害のある子どもの保護者や園・学校からの相談に応じる「教育相談」、「就学支援」、「保護者支援」、特別支援教育を担う教職員の専門性の向上をめざす「研修支援」など現場に密着した業務に取り組んでいます。



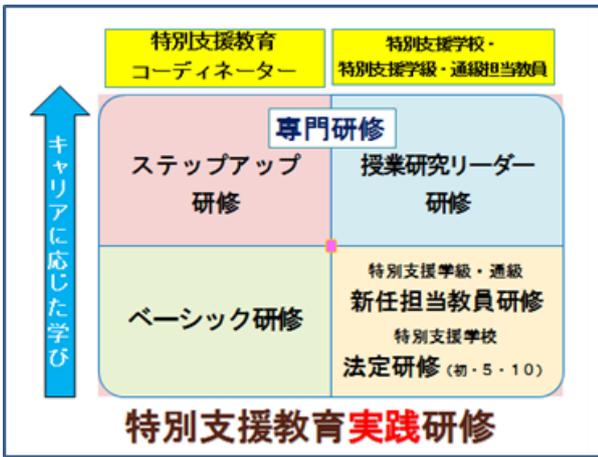
センターには、子どもの基本的な生活習慣、コミュニケーション、対人関係や行動に関する相談や、子どもの就学や養育にかかわる相談など、様々な相談が日々寄せられています。昨年度の教育相談は1,103件、延べ相談件数は8,771回で、その多くが通常学級に在籍する子どもたちの相談です。これらの相談に対して、電話相談や来所相談だけで終わるケースはほとんどなく、センターでは、子どもが生活している園や学校に、所員が直接出向いて相談を行っています。授業中や休み時間を過ごす子どもの様子を見たり、保護者や担任の先生から普段の様子をお聞きしたりしながら、それらを基に、支援会議では子どもへの支援について継続して話し合っています。

センターでは、平成23年度から「園・学校支援」という新しい指針を立てて業務を行っています。教育相談においても、対象となる子どもへの個別の相談に終始するのではなく、その相談事例を園や学校全体で共有し、学び合いながら、それぞれの先生方の授業づくりや学級経営にも反映させていくことはできないか、どのように園や学校全体の特別支援教育の推進を図ればよいのか、ということを探求しているところです。

2. 研修支援について

特別支援教育を担う教員の専門性向上に向けた研修も、業務の大きな柱です。研修においても、研修者個人の力量形成に終わるのではなく、学校において特別支援教育を推進する立場にある特別支援教育コーディネーターや授業研究リーダーが、同僚と協働して実践を進めていくことをとおして、学校全体が特別支援教育の力量を高めていくことを考えています。

センターの研修には、特別支援教育コーディネーター



を対象とした「ベーシック研修」「ステップアップ研修」と、特別支援学校教員、特別支援学級や通級指導担当教員を対象とした「新任担当教員研修」「法定研修」「授業研究リーダー研修」があります。これらの研修は、基本的に、研修者が各々に設定した課題の解決に向けて、年間を通じて実践を展開していく実践中心の形を取っています。初任者向けの研修では講義や演習も行い

ますが、経験者対象の専門研修では研修会のほとんどが報告会で、研修のベースは園や学校で同僚と協働しながら進める実践そのものです。そのためセンターでは、所属校での実践を支える手立てとして、所員や教職大学院講師による学校訪問（授業参観・授業研究会への参加）や、実践の記録化（最終的に報告集を作成）、校内教員への理解啓発（特支校「初任者研修だより」の発刊）などを行っています。また、県高校教育課特別支援・発達障害児教育グループや嶺南教育事務所特別支援教育課とも連携しています。

その他に、県内外の講師を招聘する単発型の研修講座を年15回実施しており、今年度は延べ1,759名が受講されました。近年は、小・中学校の通常学級担任の先生への受講が増え、全体の半数以上を占めています。今年度初めて教育研究所と共催した講座を開催しました。

特別支援教育センターでは、平成26年2月14日（金）に、福井県自給研修所にて、「実践研究発表会」を開催します。研修受講者の実践発表も予定しています。皆様のご参加をお待ちしております。

美浜町美浜中学校

高木 誠

美浜中学校は現在全校生徒236名、各学年3クラス、特別支援2クラスの、中規模校の中でも規模が小さくなりつつある学校である。平成21年度に新校舎が完成し、翌年グラウンドが完成して、移転が終了した。中学校としては非常に恵まれた施設で、すぐに水がひくグラウンドと、オールウェザーの直線コース、オムニコートなどのテニスコートなどが完備されている。校舎はオープンスペースの教室に、町全体で進めているエネルギー環境教育の拠点校として、太陽光パネルやシンボルのような風力発電機などもある。このような恵まれた環境下で、生徒たちは行事に、部活動に、勉強に励んでいる。また、町内唯一の中学校でもあり、町民からの期待の大きい学校である。9月には学校祭が盛大に、且つ無事に終了したところである。



本校の一大イベントである学校祭は、1・2年を学年企画・学年発表・装飾に分け、それぞれ生徒主体となるように、あるいはそれをめざし、活動を行っている。ま

た、3年生は学校祭実行委員と応援、装飾に分かれて活動する。装飾部門だけが縦割りの集団となって活動する。今年度はかなり生徒が主体となって頑張り、各企画も好評で、1年生はプラ版作り、ストラックアウトのようなゲーム、紙飛行機飛ばし、大迷路、2年生はVS嵐やTOREのようなゲーム、小人探しなどを行った。生



徒と共に町内の小学生や保護者も楽しんでた。1年生の発表はロミオとジュリエットをもとにした男子の劇と女子のダンス。2年生の発表は男子の桃太郎の劇と、女子のチアリーディング。どちらも非常に盛り上がりを見せた。体育祭では各学年3色に分かれ、様々な種目を通して勝負を楽しみながら活動していた。各色の応援合戦は本校の目玉で、3年生を中心に工夫された応援合戦が

繰り広げられた。体育祭の最後は、郷土の誇る歌手五木ひろしが歌う美浜音頭を全校で踊り、盛り上がった。学校祭エンディングでは、ほぼ全ての生徒がテーマソングにあわせて踊って楽しんでいた。2年のステージ発表に



ついては、隣町の「若祭」という行事にも出演することとなり、雨の中熱いステージを披露することができた。

地域との連携した学習も進めており、1年生ではボランティア体験学習として、自分たちの生まれ育った地域で何かできることをとということで、民生児童委員さんたちの協力を得ながら、各集落でボランティア体験活動を行っている。2年生では職場体験学習として、自分たちでアポイントを取りながら、体験学習ができる職場を探し、2日間の職場体験を行っている。特に本年度は、できる限り美浜町内にある職場を中心として、お願いをして回っている。また、全学年でエネルギー環境学習を進め、地元の発電所や電力会社、関連施設の協力を得ながら、小学校6年間の学習を踏まえ、中学校3年間のエネルギー環境学習を行っている。どれも、地元の方々の協力無しには行えないものであり、大変お世話になっている。

本校では、「学び合い、高め合う個と集団づくり ～協働の学びを通して～」という研究主題のもと、日々の教師の授業力向上をめざし、研究に励んでいる。教職大学院との協力体制にある拠点校として、教職大学院で行っていることをそのまま学校内に持ち込んだような体制で研究を行っている。インターン生も2名、本校内で様々な役割を担いながら、頑張ってくれている。

本校の研究の中心は、教科の枠を超えた小グループである。そのグループ内で順番を決め、年5回の公開授業を行い、生徒の活動を見取ることから、授業を振り返る。公開授業を通して、授業者が研究主題を捉えた観点を中心に授業を行い、それを小グループで参観し、その後の授業検討会でグループセッションを行う。本年度は、基礎・基本の定着を重視しながら、共通する担当クラスをもとにグループ編成を行っている。そのため、小グループ内でクラスの特性を考えた授業構成や、生徒の見取りを行うことを目標としている。利点は教科ごとに異なる生徒の活躍を見取ることができることである。また、その課題も見えてくるようになる。めざすところはあまり教員の負担感がないように、日常行っている授業のまま公開し気軽に研究を進められることであるが、悪戦苦闘しているところである。本校は新採用教諭が多く、毎年職員の入れ替わりもかなりの数になる。職員の年齢も比較的若く、授業力向上は重要な課題である。これまでの歴代の研究主任が、苦勞をしながら大きくこれまでの研究体制を変えて、ベテランから若手まで幅広く、様々な教科の視点や生徒を見取る目から授業を振り返り、日々の授業へと生かせるような研究にしていこうと努力してきた。課題も多々あり、よりよい研究となるように、スモールステップで取り組んできた。まだまだ努力をしていかなくてはならないが、これまで築いてきた流れを断ち切ることなく、前進できるように全職員で、さらに努力をしていきたいと考えている。

「教員養成等の改善に関する研究」 国際シンポジウム報告

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

平成25年7月13日(土)、国立教育政策研究所主催の「教員養成等の改善に関する研究」国際シンポジウムに参加し、福井大学教職大学院の取組を報告してきた。本研究の趣旨は以下の通りである。

趣旨：国立教育政策研究所では、平成25～26年度プロジェクト研究として、今後求められる教員像、大学教育像等を明確化し、適切な育成プログラムの開発研究

を行うための「教員養成等の改善に関する研究」を実施している。「教育方法の革新を踏まえた教員養成プログラム研究班」では、小中高の学校現場で学習者中心の教育を実践し、そこに学部生、大学院生、現場教員を参加させることによって、実践的指導力の育成に成功、または努力している教員養成・研修プログラムを調査することを目的としている。

以上の趣旨のもと、本シンポジウムでは4者による講演を受けて、学習科学に基づく授業デザインの方向性と今後の教員養成・現職教育の在り方が議論された。

講演はまず、カナダ・トロント大学の実験校であるチャーター・スクール「Dr. Eric Jackman Institute of Child Study」のエリザベス・モーレイ校長とリチャード・メッシーナ副校長から、学習科学をベースとした「探究型・知識構成型」の授業づくりが紹介され、続けて木村から福井大学教職大学院の「学校拠点方式」と「長期インターンシップ」の概要報告、静岡大学・益川弘如准教授から学習科学の知見を用いた教職大学院の授業実践が紹介された。最後に、東京大学・三宅なほみ教授からジグソー学習の全国展開を図る「CoREF(Consortium for Renovating Education of the Future)」の取組が報告された。

各講演後にシンポジウム・コーディネーターである白水始氏から講演内容を要約いただき、全体討論が行われた。そこでまず議論となったのが、教師としての実践的指導力の育成の「場」や「期間」の適切性である。トロント大学の実験校では大学院生(M1)が週2日の教育実習を行っており、これは福井大学教職大学院の取組と親近性がある。ただし、教育実習以外の時間は理論研究が多く、白水氏の言では「どっぷり領域知識」「どっぷり学習科学」である。益川氏が報告された授業実践は、大学院生がM1前期に「教育・学習観を見直す」、後期に「チームでの『知識創造型授業』の計画・実践」、M2で計画授業の実践やアクション・リサーチを行うという3段階をふむ。したがって、トロントと静岡の取組例は、実践と理論をそれぞれ異なるアプローチでどちらかを「土台」としてから、実践的指導力を培っていく手法を採っているといえよう。この手法論の効果等が議論され、木村からは福井大学教職大学院の「学校拠点方式」のコンセプトに基づき、実践と理論の「二元論」の克服の必要性、「調査」ではなく「記録」と「省察」の

重要性を提起した。

その後、「教育方法の革新」に向けた議論が行われた。ここでは、三宅氏が報告された「CoREF」の展開を手がかりに議論を深めていった。「CoREF」が提唱するジグソー学習の意義は共感することが多く、その普及方策は大いに勢いのあるものだった。ジグソー学習については、全国各地の学校や学級で協働学習を深める手法として多く取り入れられており、その学習上および教授上の意義は大変深いものである。ただし、ジグソー学習による「教育方法の革新」の展開方法については検討すべき余地があった。

議論では「CoREF」の展開と福井大学教職大学院の取組が比較され、そこで木村から福井大学教職大学院が「教育方法の革新」を実現するために、子どもたちの学びを支え促す学校現場と教師たちとの協働研究、そこでの実直で丁寧で相互信頼に基づく取組の重要性を強調した。一方で、「CoREF」の展開は実施主体から「Dirty & Quicker」と明言された。この点についての異議は時間の都合上シンポジウムでは控えたが、学校の現実、子どもたちの生活、教師たちの日々の挑戦と絶え間ない心砕きを教育研究者は深く熟慮する必要がある。「Dirty」という言葉の裏に後ろめたい情動の存在が垣間見えるが、この展開が果たして本当の意味での「教育方法の革新」を実現するのかを検討する必要があるだろう。

今後の教員養成・教師教育の在り方を見定め、学校・教師・子どもたちの学びと生活を支えるためには、研究や取組のアプローチの相違を超えた「Essential & Actual」な議論を進める必要がある。なお、シンポジウム終了後、エリザベス・モーレイ校長や白水氏との談話の中でこの議論の必要性に関する共通認識を得ることができた。また、そこで新たに提起された課題は、教育におけるGood Practicesを残し拓げていくネットワークを創造し、Practicesを丁寧に編み込んでいく必要性であった。

教育展望セミナーに参加して

教職大学院 准教授 小林 真由美

8月5日、6日の2日間にわたってアルカディア市ヶ谷(東京)にて「第42回教育展望セミナー」が開催され、今回のテーマは「学校をどう変えるべきか」であった。政策的な視野や社会情勢が学校に求めるもの、そして子どもたちにとってこれから必要な力、これらをふまえて今、学校という組織に対して、どこからどう切り込んでいくことが可能なのかを考えながら参加した。

1日目には「いま、学校に求められる変革」と題して安彦忠彦さん、児島邦宏さん、三宅なほみさん、佐々田亨三さんによるパネルディスカッションが行われた。印



象的だったのは児島さんからの「逆にこれだけ行政も社会もいろんな改革をしているのに、学校はなぜ変わらないのかを考えてみてください」という一言である。「学校を変えるのは教師。その持続的な改善の意思がなくて学校は変わらない。学校改善とは組織を変えることではなくその文化を変えること！学校文化の改善のマネジメントを」という。前例踏襲から脱却し、しかしながら、流行に流されず、自分の学校をあらゆる角度から眺めて、その特色を見極め、進むべき道を主体的に確立していくこと、それが学校を変えるビジョンとしての第一歩ということである。では、その切り口は何なのか。

2日目の分科会では、その答えを「学校評価を生かしたマネジメント確立の取組」という新宿西戸山中の岩永校長先生からの実践提案で見た気がした。どの学校でも、未だ十分生かし切れず頭を悩ませる「学校評価」だが、新宿西戸山中の取組の中で私が印象に残ったのは2つの点である。1つは「意図の周知徹底」である。これは、学校教育目標を「鍛錬・参画・飛躍」の3つの短いフレーズにまとめ、学校行事、委員会活動、学級目標などあらゆるものが最終的にこの3つに行き着くという学校としての統一性を意味する。「教員はもちろん、生徒そして保護者まで、いつでも誰でもこの学校が向かう方向としてこの3つを答えられる」と胸を張って校長先生が言い切れる学校づくりはすばらしい一言である。学校評価もこの3つの方向に対して正しく成果をあげているのかを図っていく。例えば、体育祭では「鍛錬と参画」に基づいて、形式的な目標は一切なく「自分を鍛え自分から参加していこう」と生きた目標で子どもたちに呼びかけると、それぞれの役割のもとでみんなが動き出す。保健委員会からは「熱中症対策について予防コメント」、練習時にも15分前に全員整列の達成、保護者までもが「参観についてのお願いチラシ」を自主的に出

す。学校評価は年度の終わりに振り返るのでなく、即時評価である。成果だけではなく目標、その過程、変容について評価し、それを生徒にも保護者にも返していき、来年へのさらなる構想が練られていく。まさに生きたPDCAサイクルである。

もう1つは「保護者の参画意識の育成」である。普通の学校評価の項目では保護者宛に「学校はいじめに対して積極的に取り組んでいますか」といった外部の立場で聞くことが多いが、「あなたは自分の子どもに困った事態が発生したとき保護者として適切に対応していますか」と保護者にもその姿勢を問い、参画意識を育てようとする。危機管理に対して「あなたからみて、学校は安全だと思いますか」でなく「あなたは家庭で安全教育を意識して子どもに防災の話をしていますか」と聞かれればその意識も変わっていくことだろう。学校の自己評価を管理職、教職員、児童生徒、そして保護者がそれぞれの立場で自分のこととして捉え、それを学校改革の切り口とするという取組は、「協働」の一つの形として大きく心に残った。午後からは鹿毛雅治さんから「教員の資質能力を高める校内研修の改革」というテーマで子どもの側から授業を見ることの重要性についてお話いただいた。福井ではもう当たり前になっていることだが、全国的には、まだまだ改革されていないことに驚かされた。

こうして外へ出て話を聞く機会を持つと、何より自分が改めて考える良い機会となるものである。今回は「学校づくり」という視点で、2日間じっくりと考えることができた気がしている。『コミュニティ・オブ・プラクティス』や『学習する組織』を読んで語り合ったり、こうした研究会に参加したりと、「組織」ということを考えることの多い夏であった。

■ 筑波大学附属小学校

基幹学力研究全国大会に参加して

スクールリーダー養成コース1年／福井市豊小学校 梶川 正樹

8月10日(土)・11日(日)に筑波大学附属小学校において行われた第16回基幹学力研究全国大会に参加した。基幹学力の定義について、今回の研究会では明確に示されなかったが、2日間の参観を通じて、論理的思考力こそが教科を横断する根源である「幹」になるのではないかと感じた。これまでどちらかという、つけたい力は国語は国語で、算数は算数でという独立した形で捉えられることが多かったように思う。しかし、新学習指導要領では、「各教科等において、国語科で培った能力を基本に、

それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、知的活動(論理や思考)やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要がある」としている。今回の基幹学力研究会のテーマは「国語と算数で育てる言葉の力」であった。この「言葉の力」という観点は、本校の研究主題「自他の考えを大切に、共に学び合う子どもたち」の研究の柱「思考力・判断力・表現力を育む言語活動の工夫」に通ずるものがあると考え、そこに着目しながら、提案授業やワーク

ショップを参観した。

講堂で行われた幾つかの提案授業は、ステージ上を教室と見立て、発表がある時は、マイクを児童に持たせ行われた。今回の提案授業は高学年ばかりで、これまでにこのような参観授業の経験がある。とは言え、何百人という授業参観者の大人の前で、夏休み中で、調子の出にくい久しぶりの授業にも関わらず、どの児童も堂々と発表する様子は、とても素晴らしかった。その背景にあるものとして、どの提案授業も児童が思わず、語りたくなる学習課題の設定があった。児童自らが考えたことを、言葉の力で周りのみんなに伝わるように表現し、発表したいという自発的な気持ちに教師がさせていた。算数では、神経衰弱対戦ゲームといった児童が楽しめる課題設定が印象的であった。課題解決の必然性も感じられ、自然な流れで学習している姿が見られた。

話が滞る場合には、「隣の友達と話をしてごらん」という支援の言葉も見られた。後に、隣同士で説明し合う場合には、次の3つの意味があることが確認できた。①考え方を互いに説明する時②聞き取ったことを再生する時③一緒に考えたり、相談する時である。他にも、「問い返し」発問についても知った。例えば、ある児童が「それはおかしい」とつぶやいた言葉に対して「何がおかしいの」と問い返しをする。その児童は、おかしいと感じた内容を持っているので、それを表現すればよいのである。「問い返し」発問は児童のつぶやき、発言、動作、書いたものなど様々

な表現に対して、その意味や根拠、よさを問う発問である。1つ問い返すとその問い返しに対して、多様な表現が生まれる。反論したり、別の案を出したりして、児童の思考を揺さぶり、新たな思考を引き出すことができることを知った。

提案授業の他に、多くのワークショップが開かれた。そこで学んだこともたくさんあるが、2点だけ紹介すると、1つ目は接続詞は思考を深めるのにとっても有効であるということである。接続詞「でも、けど、だって、ということ、やっぱり、もしかしたら、例えば」等を提示することで、言葉がつながり思考を深めることになる。2つ目は観点をはっきりさせることで、根拠を取り出すことができ、思考力をつけることができるということである。俳句や短歌の授業ならば、「この俳句からどんな様子を思い浮かべますか」と抽象的な問いではなく、「いつのことでしょう」「どんな天気でしょう」といった5W1Hや五感などを観点に、具体的な問いにすることでイメージが鮮明になり、思考力がつくことを学んだ。

この2日間で、思考力の育成について、たくさんの理論や方法を学べた。ただ、この理論を、これから実践に結びつけることが、何よりも大切なことであると思う。理論と実践を往還しながら、省察し充実した研究になるように、これからも努力していきたい。

■ 長崎大学大学院教育学研究科

教育実践と省察のコミュニティに参加して

福井大学教職大学院 特命助教 藤井 佑介

長崎大学大学院教育学研究科は平成20年度に教職実践専攻（教職大学院）を立ち上げた。理論と実践の架橋を目的とし、地域の中核としての役割を果たすことを目指してこれまで教師教育に取り組んできている。これまで教職実践専攻（教職大学院）と教科実践専攻（修士課程）があった中で、平成26年度より教職実践専攻の一本化へと再編することが予定されている。

そのような中で8月11・12日に長崎大学にて開催された「教育実践と省察のコミュニティ」へ参加した。これは長崎大学教職大学院を中心とし、毎年8月に開催されているものであり、長崎大学教職大学院の実践や成果を外部へ公表する機会となっている。今回のコミュニティを中心となって企画をされたのは教育工学を専門とされている寺嶋浩介准教授である。私自身が寺嶋准教授とは普段より交流があり、案内をいただいた次第である。

今回の具体的な内容は以下の通りである。まず1日目は「教育実践研究コミュニティながさき」と題し、ポスター発表、ワークショップ、講演が行われた。ポスター発表では長崎大学教職大学院所属の学生が実践に沿ったそれぞれの興味・関心を基に研究テーマを設定していた。その内容は授業研究、特別支援、生徒指導等、多岐に渡り、インターンシップを行った学生の課題を解決する一つの方策として展開されていた。ポスター発表の後は長崎大学教職大学院のOBでもある根津正二郎（佐世保市立広田中学校）、猿渡京（鶴南特別支援学校）、両教諭より、総括と討論が行われた。ここでは実践力について議論が行われ、①プレゼンテーションの力、②先行研究を読み込む力、③記録を取る力、といった3つの力の重要性が挙げられた。ワークショップでは寺嶋准教授が中心となり、カード構造化法を援用し、「よい実践研究とは？」ということ各グループに

て考えた。実務家・教員・研究者の解釈がバラバラである中で、方向性を見つける良い活動となった。講演では長崎大学教職大学院の立ち上げにも関わられた地頭菌健司先生（長崎県立五島海陽高等学校長）が「長崎県で期待される実践研究と教職大学院の役割」という題目で、学校経営学の視点からコンプライアンス向上による学校づくりの7つの視点等を提示され、長崎大学教職大学院と長崎県の各学校との関わりに関して話をされた。その中には大学教員が現場へ出向くことの重要性も語られ、現場と大学のネットワークに関して改めて考える機会となった。

2日目は「自由に広く学び合うコミュニティ」と題し、基調講演、企業展示、ワークショップ、シンポジウムが行われた。基調講演では奈良教育大学の小柳和喜雄教授が近年の教育情報化政策及び教育の情報化に関わる実践研究の動向について、学びのイノベーション事業やフューチャースクールの現状、さらにICT教育活動の実践動向に関して活動理論を参考として提示された。ここでは学習スタイルの多様さが提示され、既存の学習の在り方を捉え直す機会となった。企業展示は会場の後方で行われ、最新のタブレット端末の活用や教材開発の状況が紹介



された。ワークショップでは、富山大学の高橋純准教授が授業づくりのためのICT活用として実物投影機の使い方から、活用の仕方までグループで取り組んだ。教材を拡大して提示することで、それまで気づくことのできなかつた事象や視点を見つけることができ、現場の実践者にとっても大変有意義な時間となった。シンポジウムでは長崎・佐賀の教員3名が「ICT活用教育研究の種をみつけよう」ということを議題として、活発に討議が行われた。

2日間を通して、長崎大学教職大学院が地域に密着して展開されていることを体感することができた。今回は寺嶋准教授が企画されたということで教育学やICT活用に焦点を当てると同時に、実践とは何かについて探究されており、福井大学での実践とはまた違った視点で教師教育に取り組まれている現状を知ることができた。地域の人材を活かした教職大学院の一例を提示していただいた気がする。教職大学院の持つ目的やポリシーは一緒でも、地域や状況に応じた取り組みを行っていくことが今後の教師教育には重要であることを感じた。今回のような機会を得ることで、福井大学教職大学院の実践を見つめ直す良い機会となった。今後も教職大学院を中心とした他大学の教師教育実践にも関心を寄せていきたい。



大阪教育大学夜間大学院 プレフォーラムに参加して

福井大学教職大学院 教授 森 透

去る8月25日（日）大阪教育大学で行われたプレ・スクールリーダー・フォーラムへ参加したので、その感想を述べたいと思う。福井大学からの参加者は司会を勤めた私と小林真由美先生の2名、及びスクールリーダーの報告者は山本毅先生（大飯郡高浜町和田小学校教諭）、加藤学先生（福井市安居中学校教諭）、木下純子

先生（私立啓新高校教諭）の3名であった。3名の先生方には集中講座を終了した直後の忙しい時期にお願いしたが、集中の第3サイクルの省察の実践記録をもとにしっかりと報告をされたので感謝している。

研究会は午後1時に開会し、全体司会を臼井正幸先生（大阪教育大学非常勤）、開会挨拶を研究会会長の大脇

康弘先生（大阪教育大学）がなされ、その中で福井大学との交流にも触れていただき、私も若干のご挨拶をさせていただきます。

第1部は全体会で3名の方の「研究報告・実践報告」であった。①「高校改革実践10年間の事例研究」（深野康久・帝塚山学院大学）、②「校長のキャリア形成に関するライフコース研究」（高元伊智郎・茨木市立養精中学校）、③「今津孝次郎『教師が育つ条件』を読む」（赤石美保子・大阪市教育センター）。限られた時間であったが、内容の濃い発表と質疑があった。



第2部はいよいよラウンドテーブル「学校づくり実践を語る」である。ラウンドテーブルについては今まで大脇先生と何度かメールや電話で話し合い、語り手と聴き手の相互交渉の中で意味のある省察ができればという思いを語り合い、福井大学のやり方を大阪教育大学の持ち方の中に取り入れていただいている。特に報告時間の長さについては決定的に重要なポイントで、福井での「語り」の重要性を話してきた。今回の報告時間は40分であり、まだ短いと私は感じている。今回のラウンドの時間配分は、自己紹介10分、語り1人目<報告40分・話し合い20分>、休憩10分、語り2人目<報告40分・話し合い20分>、まとめ10分、というスケジュールであったが、やはり40分では語りつくせない報告の豊かさを感じた。私が司会を行ったグループの紹介をさせていただきたい。

私のグループは2名の方の報告であったが、今回は特に「学校づくり実践を語る」（大阪市立本庄中学校校長文田英之）のご報告についてご紹介したい。私は今回のラウンドテーブルで、大阪教育大学夜間大学院院生は基本的に管理職の先生方（校長・教頭クラス）であることから、どのような「語り」をされるのだろうか、管理職としてのトップダウンの視点で学校改革を語るのだろうか、という思いがあった。しかし文田先生は、「(1)はじめに（自己の経歴について）」で、新採用の時から現在までの勤務校と勤務時間を一覧表にしてご説明された。今まで中学校だけの経歴であり、3校の中学校を6年、6年、3年という勤務期間、役割は生徒指導部長が多かったこと、39歳で教頭となり3校（4年、3年、1年）、そして47歳で校長になり2校（4年、3年）で、現在の2校目が本庄中学校ということであった。現在53歳で2校目ということで、大阪市は福井と違って早くから校長につき、学校改革のマネジメントを経験さ

れていることが分った。続いて「学校づくりの実践にあたって」で、「管理職としての必要な理念」を提示され、①教育者として、「理論」「人格」「情熱」が必要、「常に生徒のために」を中心に据えて、を強調された。②リーダーとして、今求められているのは「瞬発力」「決断力」「胆力」などの総合的な能力が必要であり、それがなければ危機管理にも対応できない、それを土台として大方針を示して、人をまとめていくのが組織のトップリーダーの役目、と語られた。結論として、広義のR-P-D-C-Aサイクルを構築・運用、機能化すること、「理論」と「実践」の往還を熱く語られた。

そして、「具体的な学校づくりの実践のふり返し」として、平成23年度の4月から3月までの1年間の具体的展開を資料に基づいて語り、土台づくりと生活指導面の安定を焦点化することを目指したと強調された。資料には詳しい1年間のふり返りが記録化され、平成24年度、25年度のポイントも示されていた。最後に「具体的な学校経営方針」として中期的な学校園の経営ビジョン、今年度の学校園教育目標が示され、「学校づくり実践の視点」について、①校長のリーダーシップ、経営ビジョンの明確化、マネジメント能力、②いかに他の人と協働できるか、多様な人間関係を構築できるか、③常に自己変革できる→大学院での学びの目的（新たなチャレンジ）、④新しい時代の要請を敏感に感じ取れ、それに対応できる力量、⑤「組織づくり」ができる力量を有すること、の5点が「大切なこと」として語られた。

文田校長は語るときは熱く語られたが、質疑の時には非常に謙虚に対応されていた。私は、今回の実践報告そのものが「省察」であり、大学院に入学しなければこのような機会はなかったのではないかと述べさせていただいた。文田先生の省察と語りは、福井大学での長期実践研究報告での語りと同じものを感じた。福井のスクールリーダーと大阪の管理職とは立場は異なるが、自分自身の長期にわたる実践を省察し語るということの共通性は確信できた。今回参加させていただき本当によかったと感じている。



終了後の懇親会は非常に盛り上がり、帰りの列車の関係で早めにお店を出なければならなかったことが残念でならなかった。大脇先生をはじめ何人の方が天王寺駅の改札口まで見送りに来ていただき大変恐縮した。11月がまた楽しみである。（2013年8月29日記）

書評

著：秋田喜代美・左右社

『学びの心理学 授業をデザインする』



本書は、「学校での授業参観や校内研修に25年以上関わり、数多くの学校の教室を訪問してきた」(5頁)東京大学教育学研究科の秋田喜代美教授がこれまでの教育心理学研究・学習科学研究・教師研究・学校研究等の諸知見に基づいて知識基盤社会の学校づくりや授業デザインの方向性、教師の生涯発達を論じたものである。

第1章で秋田教授は、OECDの各種調査結果を踏まえて知識基盤社会に向けた教育改革の動向と子どもたちに求められる力を示し、その上で、授業の「質」の転換を提唱する。ここで目を引くのが、ベルギー・リューベン大学のラーバース教授による「子どもの経験から振り返る教育の質」モデルの紹介である。秋田教授はこのモデルを参照しながら「教育過程の質」について以下のように論じている。

仲間と共にいる教室に居場所感があり安心してクラスにいられ、そしてそこで教えられる内容に没頭できること、この活動とそのため空間を保証しない限り、教師の指導法や教材論だけでいかに授業の方向性を示したとしてもそれはやはり上滑りで無機質な議論になってしまう。教育過程の質の向上のためには、まずいつどのような要因で子どもが居場所を失ったり没頭できなくなるのか、あるいはどのようにして居場所が保証され、没頭が可能となるのか、子どもたちの経験から専門家が振り返ることが第一である(23頁)。

子どもたちの学びを支え促し、授業を真の「出会いの場」としてデザインするには、「参加の保証」、「聴き合う関係」、「探究の保証」が必要となるのである。

第2章では、近年「レッスン・スタディ」の名で世界各国に普及している日本の「授業研究」の歴史的展開と実際について論じられ、第3章から第5章では授業の中で繰り上げられる「談話構造の特質」、「教材・教具が生み出す力動」、「協働学習の展開」の3観点から、授業における子どもたちの学びがいかに支えられあるいは阻害されるのかが多角的に論じられる。これらの議論を踏まえ、第6章から第8章で「教師の実践的知識と即興的判断に見られる専門性」、「校内研修を機軸とした学校文化の生成」、「教師の生涯発達と授業づくりの指針」が示される。

以上の議論から、本書では「教育」そして「授業」という営みが心理的・社会的・政治的背景をもった複雑で複合的な現象でありながら、教師と子どもたちの豊かで温かい係わりがそれぞれの独創性と創造性を生み出すことを明示し、教師の教育実践をエンパワーメントする構成となっている。本書で示される教育心理学研究や学習科学研究の理論・知見を自身の教育実践に翻案しながら読み進めていただきたい。

(福井大学教職大学院 木村優)

Schedule

- 10/19sat 合同カンファレンス
- 10/26sat 合同カンファレンス (予備日)
- 11/16sat 合同カンファレンス
- 11/30sat 合同カンファレンス (予備日)
- 11/30sat 附属特別支援学校 公開研究会

【編集後記】

夏の学びの活かし挑戦する秋がいよいよ訪れました。今号に掲載された夏期集中講座の振り返りや夏の研究報告等が皆様の刺激になればと願います。10月11日付けの朝日新聞記事等で御承知の通り、福井大学教職大学院の取組もよりいっそう注目を浴びることになります。スタッフ一同、再度「帯」を締め直して、学校と先生方の実践を協働支援し、未来の教師教育の展望を拓き、子どもたちの希望を紡ぐよう、尽力してまいります。(木村優)

教職大学院Newsletter No.56

2013.10.19発行

2013.10.19印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp

